

## 日本 LD 学会第25回大会参加報告

半田 健  
(情報・支援部)

**要旨：**本稿では、日本 LD 学会第25回大会の参加報告を行う。本大会は、平成28年11月19日（土）から20日（日）にかけて神奈川県にあるパシフィコ横浜で開催された。「発達障害の子どもと家族—学習・行動・心の包括的理解と支援—」を大会テーマとし、特別講演や大会企画シンポジウム、学会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、教育講演、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表等の多彩なプログラムが企画された。国立特別支援教育総合研究所の研究者による活動状況としては、研究発表を行った研究者が27名、大会運営に携わった研究者が3名であった。また、本稿では、本大会の研究発表内容に関する情報提供を目的として、著者が参加した大会企画シンポジウムや教育講演、自主シンポジウムに関する概要を記した。

**見出し語：**日本 LD 学会、大会報告、発達障害

### I. 大会主旨について

日本 LD 学会は、LD とその近隣概念をきちんと理解し、そうした状態にある人々への科学的で、適切な発達支援を考えるために、教育、心理、医療等に携わる専門家や教師、そして保護者によって、平成4年に設立された学術研究団体である。本学会は、平成21年4月1日に法人化され、「一般社団法人日本 LD 学会」となった。本学会の目的として、LD・ADHD等の発達障害に関する研究・臨床・教育の進歩向上を図ると共に、LD 等を有する児（者）に対する教育の質的向上と福祉の増進を図ることが挙げられる。平成28年4月1日現在の会員数は、正会員8979名、名誉会員18名、機関会員48機関、賛助会員2機関である（日本 LD 学会、2016a）。

日本 LD 学会第25回大会は、平成28年11月19日（土）～20日（日）に開催された。本大会では、「発達障害の子どもと家族—学習・行動・心の包括的理解と支援—」を大会テーマとして開催された。本大会は、神奈川県にあるパシフィコ横浜を会場とし、お茶の水女子大学によって開催された。また、開催にあたり、S.E.N.S（Special Educational Needs Specialist；特別支援教育士）の会東京支部会、神奈川支部会、埼玉支部会の協力を得た。

本大会では、発達障害のある子どもの読み書きの

問題を中心の話題とし、読み書き障害の早期発見や家族研究の専門家であるフィンランドの H. Lyytinen 氏（ユヴァスキュラ大学）と、言語とバイリンガルに関する国際比較研究の専門家であるイギリスの T. Wydell 氏（ブルネイ大学）による特別公演が行われた。また、発達障害の子どもと行動の発達について、児童精神科医である齊藤万比古氏（母子愛育会愛育クリニック）による特別公演も行われた。その他には、大会企画シンポジウム、学会企画シンポジウム、研究委員会企画シンポジウム、教育講演、自主シンポジウム、口頭発表、ポスター発表等が実施された。口頭発表については、今年度より、事例を丁寧に議論する場として以前まで実施していた発表形式を復活させたという経緯があった。加えて、本大会では、文字通訳や、託児サービスといった取り組みも行われ、多くの人にとって参加しやすい大会運営がなされた（日本 LD 学会、2016b）。

### II. 大会期間中の主なスケジュール

以下の内容は、日本 LD 学会第25回大会論文集（日本 LD 学会、2016b）を参考に記した。

大会前夜の11月18日（金）には、一般公開のプレコングレスが行われた。プレコングレスでは、「今だからわかる・・・本当に必要な支援とは」がテーマ

表1 日本LD学会第25回大会の主なスケジュール

	11月18日 (金)	11月19日 (土)	11月20日 (日)
午前		<ul style="list-style-type: none"> <li>・大会会長講演「発達障害の子どもと親『育ち、育てられ』」</li> <li>・理事長挨拶「日本LD学会の魅力と可能性(3)」</li> <li>・授賞式</li> <li>・受賞者講演「発達性ディスレクシア児の臨床像から見落とし防止について考える」</li> <li>・特別講演Ⅰ「発達障害児の心と行動の発達」</li> <li>・教育講演①「読み書きの障害の指導・支援」</li> <li>・教育講演②「通常学級での学び(読み書き計算等)を保障し教科教育への参加を可能にするICT利用」</li> <li>・自主シンポジウム10件</li> <li>・口頭発表4件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・大会企画シンポジウム④「発達障害の子どもと家族への包括的な支援」</li> <li>・学会企画シンポジウム「気づいてみんなで支えたい 就学前の子どもの特別支援教育」</li> <li>・教育講演④「認知発達のメカニズムと読み書き障害」</li> <li>・教育講演⑤「脳神経心理学からみた発達障害」</li> <li>・自主シンポジウム19件</li> <li>・口頭発表8件</li> <li>・ポスター発表67件</li> </ul>
午後	<ul style="list-style-type: none"> <li>・プレ कांग्रेस「今だからわかる…本当に必要な支援とは」</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別講演Ⅱ「読み書き障害の家族性の問題と支援」</li> <li>・大会企画シンポジウム①「青年期・成人期の課題と親の願い」</li> <li>・大会企画シンポジウム②「特別支援教室のこれから」</li> <li>・大会企画シンポジウム③「言語の違いによる読み書き障害とその支援」</li> <li>・研究委員会企画シンポジウム「治療的アプローチと代替的アプローチの対立」</li> <li>・教育講演③「実践研究と質的研究」</li> <li>・全国LD親の会企画シンポジウム「保護者との連携～合理的配慮をもに考える関係作り」</li> <li>・自主シンポジウム29件</li> <li>・口頭発表8件</li> <li>・ポスター発表101件</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・特別講演Ⅲ「日本語と英語における読み書き障害」</li> <li>・大会企画シンポジウム⑤「子どもの発達・教育に関わる貧困・虐待の問題」</li> <li>・大会企画シンポジウム⑥「合理的配慮の理念と課題」</li> <li>・教育講演⑥「算数障害の理解」</li> <li>・教育講演⑦「障害者権利条約と障害者差別解消法」</li> <li>・教育講演⑧「発達障害者の社会参加における行動分析的アプローチ」</li> <li>・国際委員会企画ラウンドテーブル「Roundtable in English～Discussion with Dr.Lyytinen and Dr.Wydell～」</li> <li>・S.E.N.Sの会</li> <li>・自主シンポジウム19件</li> <li>・口頭発表1件</li> <li>・ポスター発表32件</li> </ul>

とされた。

大会1日目の11月19日(土)には、大会会長講演、理事長挨拶、授賞式、受賞者講演、特別講演2件、大会企画シンポジウム3件、研究委員会企画シンポジウム、教育講演3件、全国LD親の会企画シンポジウム、自主シンポジウム39件、口頭発表12件、ポスター発表101件が設定され、発表・協議等が行われた。

大会2日目の11月20日(日)では、特別講演1件、大会企画シンポジウム3件、学会企画シンポジウム、教育講演5件、国際委員会企画ラウンドテーブル、S.E.N.Sの会、自主シンポジウム38件、口頭発表9件、ポスター発表99件が設定され、発表・協議等が行われた。以上のスケジュールをまとめると表1の通りとなる。この他にも、全国LD親の会によるポスター展示や、日本LD学会広報委員会の企画によるブース展示、発達障害関連書籍等の展示・販売が行われた。

### Ⅲ. 国立特別支援教育総合研究所の研究者による活動状況

本大会では、国立特別支援教育総合研究所(以下、当研究所とする)の多くの研究者が研究発表を行った。日本LD学会第25回大会論文集(日本LD学会、2016b)を参考に著者が集計したところ、当研究所の発表者数は、自主シンポジウム10名、ポスター発表17名であった。また、国際委員会企画ラウンドテーブルでは1名の当研究所の研究者が司会を務め、大会実行委員として2名の当研究所の研究者が大会運営に携わった。さらに、本大会には多くの当研究所の研究者が参加し、発達障害のある子どもや大人に関する最新の研究知見について、参加者とのディスカッションを通して情報収集を行った。以上のように、本大会では、多くの当研究所の研究者が、研究成果の普及や大会運営、情報収集等に努めた。

### Ⅳ. 著者が参加した主なプログラムの概要

#### 1. 自主シンポジウム「横浜版特別支援教室の効果的な活用～児童支援専任の役割と通級指導教室

#### からの支援～」

本シンポジウムでは、インクルーシブ教育システム構築のために、特別支援教室が通常の学級と連続した学びの場として機能的に運用されるよう、横浜市で特別支援教室をうまく機能させている2校の実践報告から、特別支援教室の役割と活用の可能性、児童支援専任の役割及び通級指導教室によるセンター的機能(以下、支援センター機能とする)と絡めて検討を行うことを目的とした(冢田・岡田・大山・矢島・川上・安藤・笹森、2016)。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。横浜市立飯島小学校の大山氏より、特別支援教室に関する自校の取り組みから、①横浜市の児童支援体制強化事業の一環である児童支援専任の役割、②校内における連続性のある学びの場としての特別支援教室の位置づけ、③個別の指導計画の工夫等の事例、について発表がなされた。

横浜市立平沼小学校の川上氏より、通級指導教室の支援センター機能によって学校支援を行った立場から、①支援センター機能の役割、②実際に取り組んだ事例、③特別支援教室と通級指導教室における協力体制の有用性、について発表がなされた。

横浜市立斎藤分小学校の矢島氏より、通級指導教室の支援センター機能によって学校支援を受けた小規模校の特別支援教室担任の立場から、①特別支援教室でスタディスキルやソーシャルスキルを指導した事例、②教員が支援センター機能によって身につけた専門性を発揮するための展望、について発表がなされた。

指定討論者による発表の概要は以下の通りであった。NPO法人らんぷあんぷらざの安藤氏より、全体として、特別支援教室の法的根拠、児童支援専任の役割と重要性、通級指導教室による支援センター機能のオリジナリティに関するまとめがなされた。また、各話題提供者には、個別の指導計画の実践を深めるための展望(大山氏)、通級指導教室を担当する教員のスキルアップを進めるための展望(川上氏)、小規模校での取り組みを中規模校に広げるための仕組み(矢島氏)について質問が行われた。

当研究所の笹森氏より、各話題提供者の発表に関するキーワードとして、特別支援教室と通常の学級

の距離感、学校全体における段階的な支援、個別の指導計画の展望、保護者との合意形成、に関するまとめがなされた。

## 2. 自主シンポジウム「学びのユニバーサルデザイン(UDL)最新情報～学校におけるUDL実践を支える教員養成・研修、研究との連携～」

本シンポジウムでは、米国での「学びのユニバーサルデザイン(Universal Design for Learning: 以下、UDLとする)」の実践の現状について、大学における教員養成の実際、実践と研究をつなげる努力の実際、学校現場における運営の実際を報告し、日本におけるUDLの今後の展開のヒントを得るために議論を深めることを目的とした(名越・バーンズ・亀山・川俣・竹前セルズ, 2016)。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。早稲田大学のバーンズ・亀山氏より、米国の大学における教員養成の実際に関して、①教育に関する法律、②教員に求められる役割と専門性、③UDLの法的根拠、について発表がなされた。

埼玉大学の名越氏より、実践と研究をつなげる努力の実際に関して、①国外におけるUDL研究のレビュー研究3編の紹介、②今後のUDL研究の研究課題、③UDL-IRN(Universal Design for Learning Implementation and Research Network)サミットの報告、について発表がなされた。

早稲田大学のバーンズ・亀山氏より、学校現場における運営の実際に関して、①UDLのフレームワーク、②米国におけるUDLの事例、③UDLを導入するための留意点、について発表がなされた。

指定討論者である大正大学の川俣氏より、各話題提供について、①教員養成の展望、②UDL研究の展望、③UDLの運営の展望、といった視点でまとめがなされた。

最後に、本シンポジウムでは、発表時間の90分間のうち、発表者と参加者のディスカッションに30分を割いて、国内の実践や国外の法律成立に関する過程、研究する際の評価指標について活発な議論が行われた。

## 3. 教育講演「算数障害の理解～計算のつまずきの

### 評価と指導・支援～」

本教育講演では、星槎大学大学院の伊藤氏より、算数障害の主要な症状のひとつである計算に焦点を当て、計算につまずきを示しているいくつかの事例を通して、算数障害を理解するために、計算のつまずきのアセスメント(評価)と指導について論じることを目的とした(伊藤, 2016)。本教育講演では、以下の6つのテーマについて講演が行われた。

#### 1) 算数障害とは何か

本テーマでは、算数障害の定義や判断基準等について、①文部科学省の定義、②文部科学省の判断基準(試案)、③文部科学省の実態把握の観点(試案)、④ICD-10(国際疾病分類第10版)の学力の特異的発達障害・特異的算数能力障害の定義、⑤DSM-5(精神疾患の診断・統計第5版)の定義が挙げられた。そして、学習(算数・数学)につまずきを示す子どもとして、①発達障害(自閉症スペクトラム、注意欠陥多動性障害)の子ども、②様々な障害・疾患(身体障害、病弱)をかかえる子ども、③通常の学級に在る教育的ニーズのある子どもが挙げられた。また、数の感覚(number sense)に関する認知心理学的な説明や、乳児の数の感覚に関する研究紹介もなされた。

#### 2) 計算の発達過程

本テーマでは、子どもの計算の発達過程として、数量概念の発達過程や計数の能力に関する発達があると報告された。また、子どもの計算に使用する方略はcount-based方略からmemory-based方略へ発達することや、多位数の計算を解くための手順は数の大小や数の合成・分解の知識から子ども自身で考案する場合もあるが、多くの子どもは学校でその手続きを習うことによって習得することも報告された。さらに、基本的な計算simple calculation(count-based方略からmemory-based方略へ)や複雑な計算complex calculation(計算の概念的理解+手続き的スキルの適用)について説明がなされた。

#### 3) 算数・数学教育から

本テーマでは、幼稚園教育要領における数量に関

連する目標や、小学校学習指導要領における算数の目標、中学校学習指導要領における数学の目標、高等学校学習指導要領における数学の目標について説明がなされた。

#### 4) 計算のつまずきとは

本テーマでは、幼稚園、小学校、中学校、高等学校における計算のつまずきについて、それぞれの子どもの状態が報告された。

#### 5) 計算のつまずきの評価・アセスメント

本テーマでは、計算のアセスメントの指標として、simple calculation に関するアセスメントと complex calculation に関するアセスメントがあることが説明された。また、計算領域のつまずきのポイントとして、①数の感覚 (number sense)、②基本的な計算、③多位数の計算、④文章題が挙げられた。就学前に必要なアセスメント指標や計算のアセスメント指標についても説明がされた。

#### 6) 計算につまずきを示す事例

本テーマでは、計算のつまずき箇所が異なる子どもの事例について、アセスメントから支援までの流れが紹介された。そして、「簡単な計算から複雑な計算へとステップさせていく」という従来の考え方から「簡単な計算ができるからといって複雑な計算ができるわけではない」という計算の処理の問題を考慮する考え方への移行の必要性について指摘がなされた。

### 4. 大会企画シンポジウム「子どもの発達・教育に関わる貧困・虐待の問題」

本シンポジウムでは、子どもの貧困・虐待と学習困難・発達障害等とはどのような関連があり、どのような支援を考えていけばよいのか等の現状と課題について、様々な観点から検討することを目的とした(松尾・佐藤・佐藤・松田・玉井, 2016)。

話題提供者による発表の概要は以下の通りであった。NPO 法人文化学習協同ネットワークの佐藤氏より、生活保護世帯の子ども・若者へのソーシャルワーク事業の取り組みから、①本ネットワークの歩み、

②自治体に対する支援システムの概要、③生活保護世帯の若者に支援を行った事例、④生活保護世帯の実情、について発表がなされた。

法律事務所たいとうの佐藤氏より、カリヨン子ども家(児童虐待等で子どもが一時的に避難できるシェルター)に携わった弁護士の立場から、①シェルターの概要、②教育虐待によってシェルターに避難してきた子どもの事例、③教育虐待と法律上の児童虐待の関係、④人権からみた教育虐待、について発表がなされた。

東京学芸大学の松田氏より、経済的に困難な家庭状況にある児童生徒への取り組みから、①大学と教育委員会が連携した事例、②附属学校と協働した教員養成系大学による経済的に困難な家庭状況にある児童・生徒へのパッケージ型支援に関する調査研究プロジェクトの概要、について発表がなされた。

指定討論者である大正大学の玉井氏より、①貧困・虐待に関するセーフティネット、②子どもの意思決定、③貧困・虐待が子どもの発達に及ぼす影響、④支援に関する課題、といった視点でまとめがなされた。

最後に、本シンポジウムでは、発表時間の120分間のうち、発表者と参加者のディスカッションに30分を割いて、子どもの教育や家族の再統合に関する支援・制度、学校と福祉の連携に関する個人情報の扱い等について活発な議論が行われた。

## V. 本大会への参加を通して

本大会では、非常に多くの教育・心理・福祉・医療に携わる専門家や教師、保護者が参加し、大会テーマである、発達障害のある子どもの学習・行動・心、そしてその家族への包括的な理解と指導・支援の在り方について密度の濃い情報交換が行われた。著者も参加者の思いや考えに触れることで、当研究所が果たす役割の重要性や今後の展開について改めて考える機会となった。

また、例年、参加者数が増していく本学会の年次大会では、聴講を希望する参加者が会場に入りきれない事態や、発表開始前から会場前に参加者が長蛇の列を成すことで混雑が起きる事態がみられた。こ

のような事態を解消するために、本大会より大会運営に関して、自主シンポジウムに参加するための整理券を事前配布する取り組みや教育講演の予約を事前にインターネットで行う取り組みが行われた。この取り組みにより、会場の混雑が緩和されたように感じた。さらに、本大会では、大会公式アプリをダウンロードすることで、タイムテーブルや会場案内等を利用でき、主催者から会場の空き具合や整理券配布状況等が通知された。この取り組みも、参加者のスムーズな参加に寄与したと考える。

最後に、有意義なプログラムの企画や会場運営を行っていただいた日本 LD 学会及び大会実行委員会の皆様に厚く御礼を申し上げる。

### 引用文献

- 伊藤一美 (2016). 算数障害の理解～計算のつまずきの評価と指導・支援～. 日本 LD 学会第25回大会論文集.
- 松尾直博・佐藤真一郎・佐藤香代・松田恵示・玉井邦夫 (2016). 子どもの発達・教育に関わる貧困・虐待の問題. 日本 LD 学会第25回大会論文集.
- 名越斉子・バーンズ亀山静子・川俣智路・竹前セルズ奈津子 (2016). 学びのユニバーサルデザイン (UDL)最新情報～学校における UDL 実践を支える教員養成・研修, 研究との連携～. 日本 LD 学会第25回大会論文集.
- 日本 LD 学会 (2016a). 一般社団法人日本 LD 学会ホームページ. <http://www.jald.or.jp/> (アクセス日, 2016-11-24)
- 日本 LD 学会 (2016b). 日本 LD 学会第25回大会論文集.
- 冢田三枝子・岡田克己・大山美香・矢島直子・川上賢祐・安藤壽子・笹森洋樹 (2016). 横浜版特別支援教室の効果的な活用～児童支援専任の役割と通級指導教室からの支援～. 日本 LD 学会第25回大会論文集.